

2011年

秋の課題作文優秀作品【小学部】

H・Nさん（荏田南小）

私は「やさしい」という意味を辞書で調べてみた。すると「周囲や相手に気をつかう」「悪い影響をおよぼさない」など相手を傷つけないという意味が多かった。しかし、一つ「情深い」という言葉が載っていた。そもそも「情」というのは、物事に感じて起こる心の動きのことをいう。「情深い」というのは、私が思い描いていた「やさしさ」という言葉にぴったり当てはまった気がした。

私は学校で大縄を回す係りとなった。回し方がうまくいかず、周からたくさんの方の非難を浴び自信を失くして泣いてしまった。すると二歳からの親友が心配して声をかけてきてくれた。私が訳を話すと、親友はまるで自分のことのように一緒に泣いてくれた。これは、作者がいう他人の痛みが容易に伝染してしまう「やさしさ」とは思いたくない。少なくとも私と親友の間には「自己防衛」のためのやさしさは存在しないと確信している。そのようなものは必要ないと自信をもって言える。でも、よく考えてみると普通に仲のよい友達には、自己防衛はいらぬという自信はない。むしろ必要となる。

つまり、人によってやさしさというのは無意識のうちに異なっているのかもしれない。この無意識な気持ちが消極的なやさしさとなって現われているのだろう。作者は「自己防衛を含んだ消極的なやさしさ」と「相手の気持ちに“立ち入る”形で距離をつめる積極的なやさしさ」は誰もが持ち合わせていると主張したいのだろう。

近年のやさしさは「頭」を使い、昔のやさしさは「心」を使っているところの本を通して私は感じた。だとすれば、私と親友は「心」でつながっている。これからもずっと、それを大切にしていきたい。そして「頭」を使ったやさしさも大切な手段だけれど、一人でも多くの人に「心」を使い、やさしさの原点を忘れないでいこうと思った。

S・Aくん（三保小）

僕にとってやさしさとはなんだろう考えてみました。お年寄りに席をゆずるやさしさ、困っている友達を助けるやさしさ。僕は、目に見えるやさしさだけが、やさしさとは言えない気がします。「あの子、大丈夫かな」と思うだけでも、立派なやさしさの一つだと思います。相手を思いやるのが大切なのです。

僕も、友達や家族、先生たちなど、たくさんの人たちからやさしさをもらっています。ちょっとした声かけが嬉しかったり、時にはそれから元気をもらったりもします。「おはよう」「元気」「一緒に遊ぼう」など、なんでもない言葉が嬉しいときがあります。自分がされて嬉しいことは、みんなにもしてあげたいと思います。けれど、自分が疲れているときや、余裕が無い時は、それができないこともあります。友達のやさしさに、気づかなかつたり、後で気づいたりど。

何もしないことがやさしさであったり、はっきりと辛いことを言うこともやさしさであったりします。とても奥が深く、その時々でやさしさは違ってきます。僕が親切なことをしたつもりでも、相手はやさしいと感じないかもしれません。

クラスの中でもみんなそれぞれ違うやさしさを持っています。色々なやさしさがあり、どれかひとつをやさしさとするのは難しいです。

本当のやさしさとは何かを考えるよりも、その人が安心できることが一番大切です。今はまだ僕は小学生。これから色々な人に出会い、たくさんの方のやさしさを感じ、人からやさしく素敵だなど思われる大人になりたいです。

私は、やさしさとは人に対する思いやりだと思う。

思いやりとは、相手の立場になって考え、困っている人がいたら手助けをすることだと思う。

しかし、頭ではわかっているものなかなか実行にはうつせない。

他の人も、私と同じように困っている人がいたら助けてあげたいと思っている人がいると思う。でも、恥ずかしいという気持ちが先に立ち、勇気が出ない。なぜだろう。

以前私は、塾帰りのバスの中でお年寄りに席をゆずったことがある。その時は何も考えず、お年寄りの人がたくさん荷物を持っていたのを見てすぐに声をかけることができた。そして、とても感謝された。

私は考えてみた。そのときはひとりだった。きっと友だちがいたら、友だちの前で自分だけがいい子になっていると思われたくないとか、ひやかされるのではないとか、余計なことを考えたと思う。でも、思いやりややさしさとは、周りから自分がどう思われることではなく、相手を思って行動することが一番大切なのだと私は気づいた。

やさしさとは、二通りあると思う。

一つ目は、相手が困っているときに行動に移すこと。

二つ目は、相手が悲しんでいるときや辛い時にあえて言葉にしないでそっと寄り添うことだと思う。

この二通りのやさしさを心の中で意識しながら、これからは人に対する思いやりを持って、日々の生活を送りたいと思う。

2011年

秋の課題作文優秀作品【中学部】

M・Yさん（茅ヶ崎中）

やさしさとは、思いやりの心から生まれてくるものだと思います。独りよがりのやさしさは相手に負担がかかります。それは「おせっかい」というものです。決して自己満足にならない様に相手によってやさしさのかけ方を変えていく必要があります。まず、相手の状況や立場を理解し、気持ちを想像し共感することから始めます。

積極的に関わろうとするストレートなやさしさばかりが良いとは限りません。なぜなら、現在は人どうしの距離感をとるのが難しく、やさしさをかけられる側も、自分のことで人に面倒をかけるのは悪いと遠慮する気持ちと同時に他人にむやみに踏み込まれたくないという気持ちがあるからです。だから時には、ややこしい事には関わりたいくないと思う気持ちは悪い事ではないと思います。

人は自分が苦しい時助けてもらった体験や、悲しかった時、恥ずかしかった時、そつとしてほしかった事などから思いやりを学んでいきます。その体験が力となって自分も誰かの力になれないのだろうかと強く心が動き、やさしさが生まれてくるのだと思います。やさしさは見返りなく与えるものだとするならば損をしている様に見えます。

与えてもらう側がやさしくしてもらって当たり前と図々しい態度をとれば不愉快です。手助けしてくれる人がやりやすいように共に協力する姿勢や素直に感謝の気持ちを表すことでやさしさは一方通行ではなくなります。与えられる側にもやさしさは必要です。やさしさの形はいろいろありますが、私の思う「やさしい人」とは相手の立場に立ったやさしさを考えられる人、たとえ損をしても相手のために行動を起こせる人、感謝の気持ちを持てる人だと思います。

そのやさしさは相手に伝わり、相手を幸せにします。その幸せはきつと次の誰かを幸せにし、そうしてやさしさが広がっていくものだと思います。

N・Mくん（茅ヶ崎中）

「やさしい人」それは、積極的に相手に関われる人のことをいうと思う。

近年、消極的なやさしさと言われ、その事例としてメールは絶対返信するということがあるが、本当にこれをやさしいと言えるのだろうか。メールがない昔の人は、手紙がきた場合「お手紙ありがとうございます」ということで必ず手紙を送っていたそう。相手が文を書くために時間を使い送っているのだから、感謝して手紙を書き送るという礼儀なのである。今は、ボタンを押し、その場で送信するという簡単なメールだが、今も昔も変わらず返信するのは「やさしさ」ではなく「礼儀」として存在しているからとすべきである。

このように、消極的なやさしさには、勘違いしている部分があるのではないだろうか。消極的であると自分の考えるやさしさを感じ取ってくれるとは思わない。ただ自分がやさしいことをしているという自己満足になっているだけだと思う。道徳でなるべく多くの人が幸せになるほうが良いと聞いたことがある。なので、消極的なやさしさではダメだと思う。

では、積極的なやさしさは何だろうか。それは、相手の気持ちを読みサポートしてあげることでないだろうか。しかし、それを嫌がる人はいる。一度は行動に出てみて嫌がられたら謝ればいいと思う。相手も思いやりのあるやさしい人だったんだと感じるであろう。自分は相手にやさしく接しただけなのだから、嫌がられても悔やんだりほしくないと思う。しかし、空気を読めないやさしいとはいえない。変な接し方も相手を傷つける。このように考えると積極的なやさしさは奥が深く非常に難しいものだと思う。

相手との関係を作ることができる積極的な行動は消極的であるよりお互い気持ちがいいのである。学ぶこともたくさんあるだろう。

T・Hくん（中山中）

ぼくは、電車で席を譲るなどの目に見えるやさしさの他に、心で感じ取れるやさしさがあると思う。

東日本大震災が起きたため、三月中に行われるはずだった卒業式が七月に行われることになった。卒業式が行われることになって、うれしい反面、ひとつ悲しいことがあった。それは津波で未だに行方がわからない峻のことだ。やんちゃでムードメーカーだった峻が居なくなるなんて、考えられなかった。

当日、担任の村田先生は、やぎみたいにひげを伸ばしていた。峻が見つかるようにと願いをかけていると先生は言っていた。村田先生らしいやさしさだった。

式が始まった。卒業証書を次々に受け取る中、

「小西峻。」

峻の名前が呼ばれた。校長先生の前に手が伸びた。峻の父だった。卒業証書を受け取りに来てくれたのだ。ぼくは、涙がこぼれそうになった。

峻の父さんが、この会場に来るのは、すごく勇気が必要だったと思う。ぼくは、峻の父さんに、とても強いやさしさを感じた。

退場の時には、雄斗が列から外れ、峻の写真を取りに行き、峻の代わりに退場した。写真を見ると、もうあの姿で峻は戻ってこないと感じてしまって、写真を見るのは、とても辛かった。だが、雄斗の行動は、雄斗なりのやさしさが出ていた。

「峻はここにいるよ。」

と、友だちが言った。峻は目では見えないが、峻は絶対に卒業式には来ていた。みんなの心がひとつになった。会場全部がやさしさに包まれた。

小学校の最後、たくさんのやさしさをぼくは感じた。

S・Sさん（金井中）

世の中には、やさしい人とそうではない人がいるのではなく、人はだれでも「やさしさ」をもっているのだと私は思う。

ではなぜ、「やさしさ」は変容し、今までの「やさしさ」と新しい「やさしさ」という考えが生まれるのだろうか。私は、今までもそして現在も、「やさしさ」は変わらないと思う。何かが変わったとするならば、それは自分たち、人間自身だろう。今までは、自分の「やさしさ」を積極的に行動に移すことが「やさしさ」だと考える人が多かったが、現在は、消極的な私たちの「やさしさ」も大切だと考える人が増えたのではないだろうか。

何を「やさしさ」だと感じるかは人それぞれだ。私が思う「やさしさ」とは、相手にとって何が最善であるか考えることだ。自分の考えを、行動に移すか移さないかは、たいした問題ではない気がする。私にとっては、実際に行動に移すか移さないかを考えることもまた「やさしさ」だと感じる。

私は、「やさしさ」自体がどのようなものではなく「やさしさ」をもった人々が、どうするのが一番大切であると思う。自分もった「やさしさ」を、どのようなものにするかはその人次第だ。また、相手の「やさしさ」をどのような受けとめるかも、その人次第だ。

このように考えると、「やさしさ」は、それを操る人、または受けとめる人により、必ずしも同じ解釈にはならない。そのことを、私たちは十分に理解しなければならぬと思う。

私は消極的なやさしさも、積極的なやさしさも必要だし、大切だと思う。どちらにも利点があり、それにともなつて欠点がある。その時々に合わせて使い分け、相手のことを心から考えられる人こそが本当に優しい人だと思う。つまり、私の考えるやさしさとは「時に甘く、時に厳しく」を上手く使い分けるといふことだ。

では、具体的に優しさを使い分けるといふことはどのようなことなのだろうか。その象徴ともいえるのが教員だと私は思う。中学生や小学生だと年齢が近く説明しにくいので、幼児を例えとして説明するとしよう。幼児にはできないことが多いが、それと同じくらいできるけどやりたくないからやらぬものがある。例えば、後片付けだ。「遊んだものの、片付けは面倒だからやらぬ。」そんな子供も多い。重くて運べない、大きくて持てないなどの理由もあるが、箱に入れるだけや、一人で出来なくても一緒にしてもらおうなどいくらでも方法はあるだろう。では、そんなとき幼児が「やりたくない。」とだだを捏ねたらどうすればいいのだろうか。まだ小さいし、かわいそうだからやってあげるといふ人もいるだろう。けれど、これは本当の優しさとは違うと思う。大人になつてから困るのは自分自身なのだ。つまり、優しさと甘やかすことは全く別なのである。時には厳しくすることも優しさのひとつなのだ。

このように、優しさにはたくさんの形がある。嫌なことはすべて取り除くことではなく厳しくすること、見守ること、相手の気持ちを損なわないようにすることなどさまざまだ。けれど、偏つた考えをすると、それは優しいように見えて残酷なことをしていると思う。なので、私は「時に甘く、時に厳しく」のように、その状況に合わせて使い分けることが大切だと思う。